

危機の結目

危機の結目

現代美術覚え書
岡田隆彦著

イザラ書房

危機の結晶——現代美術覚え書

著者

岡田隆彦

発行者

今泉道生

昭和四十五年十二月二十五日発行

発行所

株式会社 イザラ書房

東京都文京区本郷四丁目八番七号 郵便番号 一一三

電話 八一—八七五三 振替東京 一四八〇二五

印刷

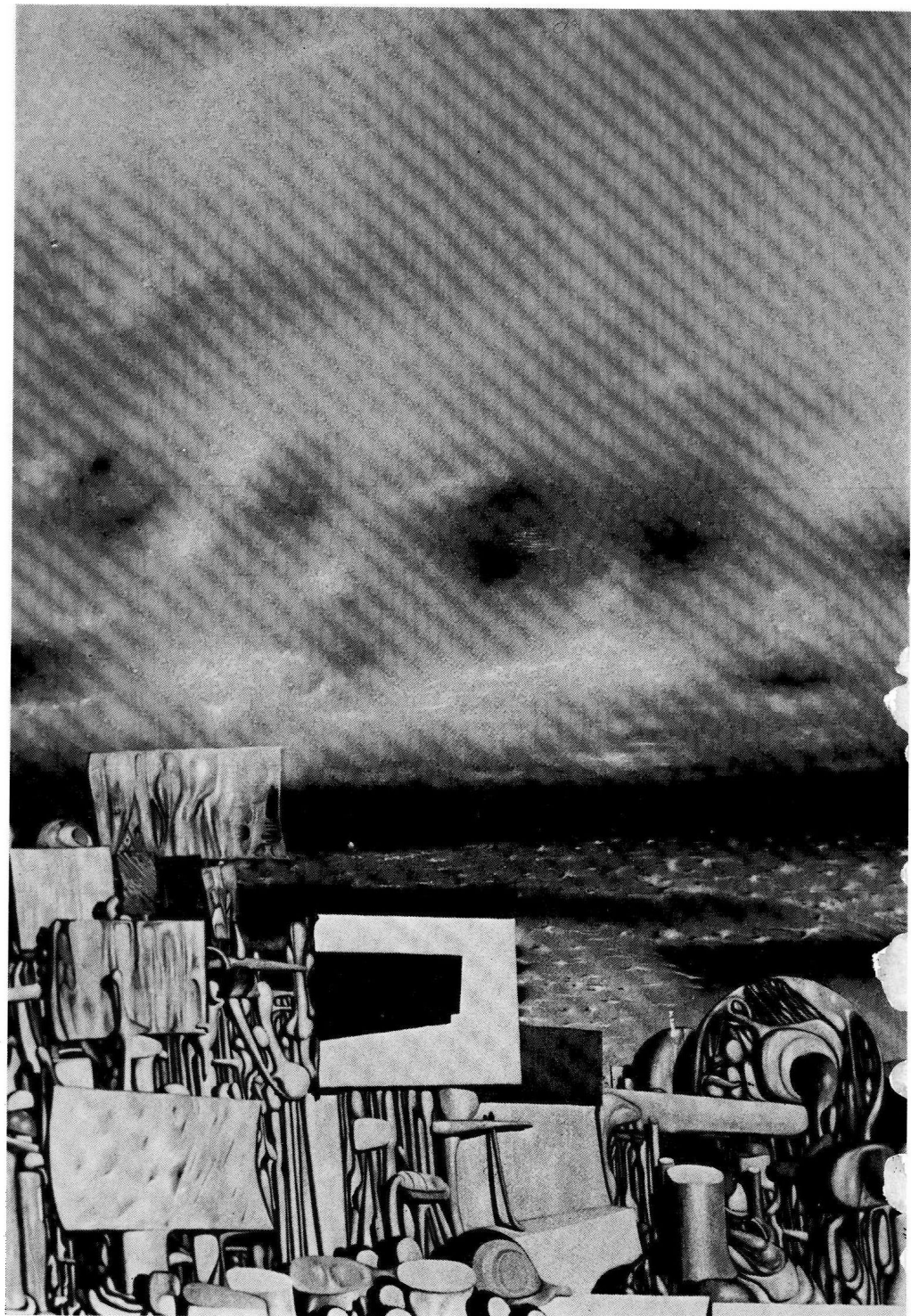
重光印刷株式会社

製本

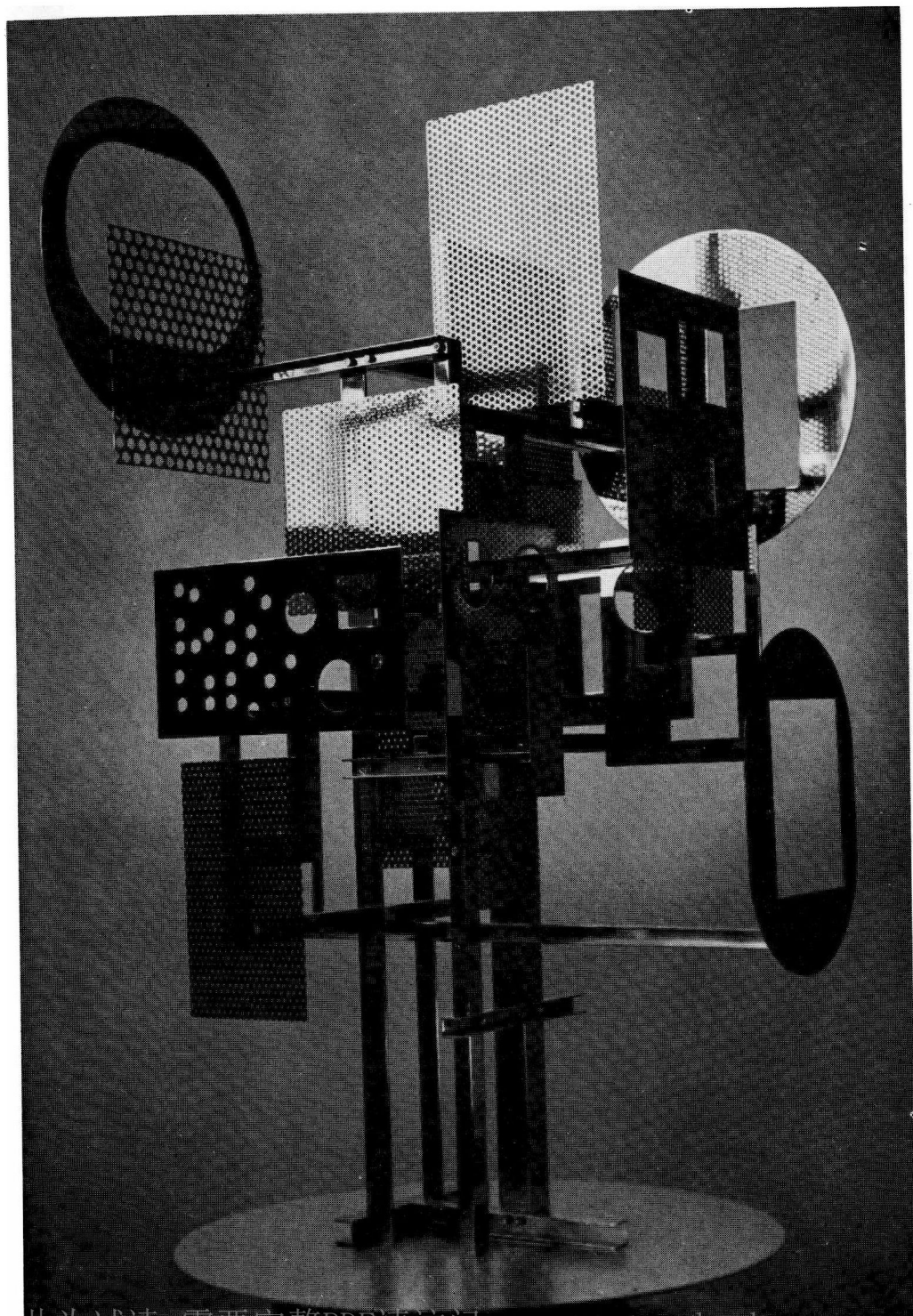
鈴木秀勝製本所

定価

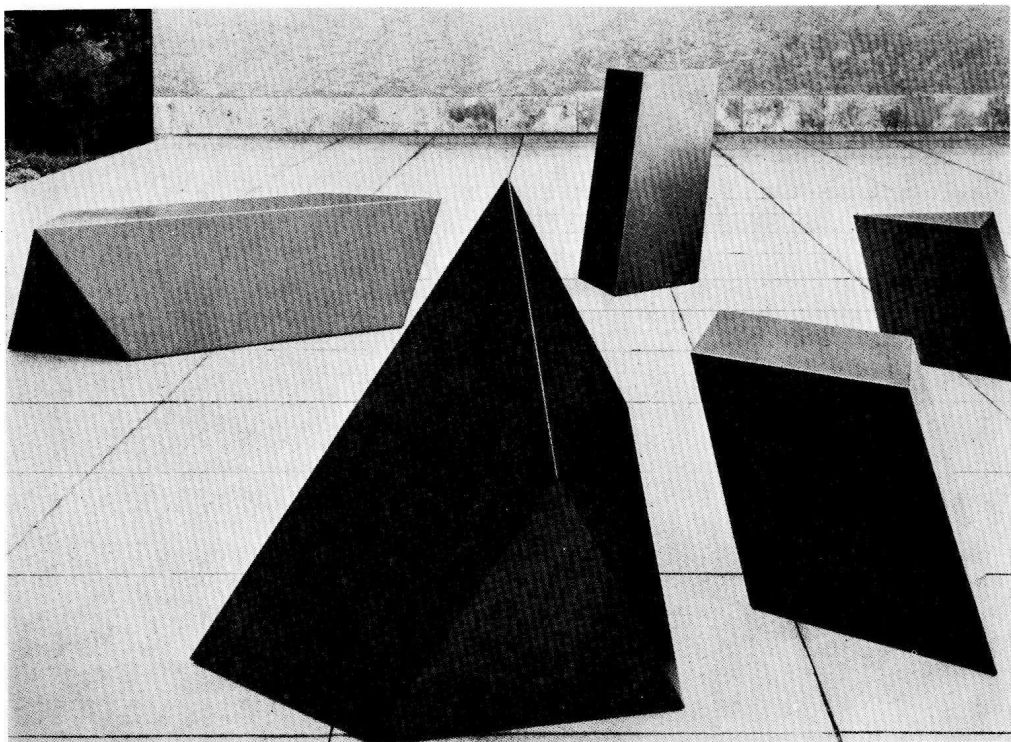
一三〇〇円



イヴ・タンギー「時の蜃気楼」 1954



ヒルマ・シエフキール 「LUX19」 1959



トニー・スミス 「Wandering Rocks」 1967



クリスト「リトル湾・海岸の梱包」 1969



危機の結晶——現代美術覚え書

目次

はらんするタマシイの邦——イヴ・タンギーの難破譚	5
機械の着想	45
小市民的芸術観の陥穽	109
物体思考の変遷	121
同棲した芸術とテクノロジー	141
極楽浄土もデザイン次第	197
実像と全体性を求めて	191
根源からあふれでるもの	221
虚像が行為を促すために	261

娑婆で見た瀧口修造 303

移行する物神 315

体系を拒絶する光 335

新しい空間認識をめぐって 343

おばえがき 369

カバール・絵*J・アルプ
本文レイアウト*吉本直貴

はらんするタマシイの邦

——イヴ・タンギーの難破譚



イヴ・タンギー
「影の国」・1927

それから不安と疲労とに精根つきて、わたしは深い眠りにおちた。ところが、もういちど眼を開いたとき、わたしはまた日射しのなかにいたのです。美しい国が眼のまえに横たわり、川岸にしばらくつけられたわたしの筏は親しげな黒ん坊たちにとりかこまれていました――。

A・ラング「船乗シンドバッドの七つの航海」

いまごろ、シュルレアリスムの一つの成果とされている画家のしごとについてふれることは、いささか時代おくれのことかもしれない、シュルレアリスムのすべてを一つの歴史的推移のなかでとらえることに、わたしは不満をもってはいるが、さいきんの美術活動におけるめまぐるしい動向が好むと好まざるとにかかわらずわれわれに注目を強いるとき、いきおいその全体的な志向をふくんだ運動がステイックな文脈のなかに置きかえられてしまうことを、わたしは残念に思うのだ、ただ、文芸一般（とりわけ詩の分野においてだつたが）と絵画・彫刻とにおいて、その理念や概念は、諸家によって多くの労苦をともないながら、おおむね紹介されたわけだが、その具体的結実の重要な一部をしめす絵画の享受となると、じゅうぶんなされていないように思う。わが国にだけ限っていうなら、マックス・エルンスト、サルバドル・ダリ、ホアン・ミロ、あるいはマルセル・デュシャンもふくめて、この運動を代表する画家たちのいく人かは既に多くの客観的な理解を得ているが、思うにイヴ・タンギーをのぞいてはそれらの理解も不十分なものに終ってしまうだろう。

かりにこの大いなる活動を、たんにアンドレ・ブルトン個人の思想を根底においたものとして考えることもできるが、それはそれとして、たとえば、無意識ではなく前意識の領野としての夢のあらゆる影像や「偶然と事故への呼びかけを創造の第一原理までたかめること」によって、現代芸術のおかたい形式主義をだしぬいた「(S・ハンター) かれらの投企、そしてまた至高点の理想や神秘主義的側面について、一つの具体的感覚的な例証を求めようとするとき、わたしにはタンギーの諸作がすぐに脳裏に浮かんてくる。かれの実現した、まさに虚像としての、非現実の光景が、わたしをしめつける。ディアレクティクな歴史の脈絡の現実の諸相は、むしろわたしを全面的にうごかしうるファクターではある。だが、そのときわたしを論理的証明もないままに、覚醒させる(あるいは、いまひとつの催眠状態を強いる)影像の存在もまた、同じようにわたしを全面的にうごかしていくにちがいない。

わたしなりに、シュルレアリストたちへの感謝をこめて、その理念や教義を直接あらわす便宜的な用語、あるいは概念的な照応は意識的にできるだけ避けながら、タンギーについて考えてみようと思う。それがたんなる側面的理解に終止しない、という自負はある。このばあい、はじめに、わたしはタンギーを大たんにも今日のバントル・ナイーフ(素朴画家)として考え、その全容はその精神の必然的な発展であると仮定してみたい。断つておくが、これがすべてというつもりはむしろない。タンギーがオートマチスムを独自なかたちで肉化していく過程が、これに重なっているからだ。

そのまえに、かれの履歴の概略を書き写しておこう。

一九〇〇年 一月五日、パリのコンコルドにあった海運省ビルのなかで生まれる。(一九世紀末の版画家メリヨンの作品に、このビルを描いたものがある、それは、パレ・ガブリエルの柱列に面してビルがあり、オペリスクの細い日時計よりも高く、天空を、雌馬たちと丸木船、それに人間のシルエットが跨る鯨たちが、西方から雲といっしょにやって来る奇妙な光景を描いたものだった。) 両親はブルターニュ出身。父親は、かれが生まれたとき、すでに船長の職を退き、管理職として海運省で働いていた。幼年時代は、ブルターニュのロクロナンで過ごす。

一九一八年 パリで教育をうけ大学入学資格試験に合格しただけで学業を放棄したあと、船員の見習いとして商船に乗り組みアフリカ、南アメリカ、イギリス、ポルトガル、スペインなどをまわる。

一九二〇年 徴用されてリュネヴィルの歩兵連隊に所属。そこで、のちに「ことば」などを著わした詩人でありブルトンの友達であったジャック・プレヴェールを知る。同じく詩人のマルセル・デュアメルとも知りあい、三人はかたい友情でむすばれる。とりわけ、家族が同じブルターニュ出身であることもあって、プレヴェールとの出会いは、かれにとってかなり重要なものであったようである。

一九二二年 兵役を解除され、パリに戻って、プレヴェールらとモンパルナスをぶらつく。かれらはきよくたんな貧窮を経験したらしい。翌年、ポール・ギヨームの画廊のウィンドウでキリコの初期の作品を見る。その感動からとつぜん絵を描きはじめは、

ということになっている。

一九二五年 ブルトンと逢い、以後多くのシュルレアリストたちと交わって、その運動に参加、かれにとって、シュルレアリスムの教祖的存在であったブルトンとの出会い、けだし運命的なものであったその後、数多くのシュルレアリスム展に出品。

一九二七年 最初の個展をひらく。ブルトンがカタログに序文をよせる。

一九三〇年—三一年 アフリカ旅行。

一九三九年 大戦の災禍をさけてニューヨークへ行く。

一九四〇年 レノ、サンフランシスコ、ロサンゼルスに滞在す。

一九四八年 コネチカッドベリーの農場に定住し、アメリカの市民権を得る。

一九五二年 パリで個展。

一九五五年 一月、大作「弧の増殖」をのこして死去。

同年 八月、ニューヨーク近代美術館で回顧展。J・T・ソビーがカタログにモノグラフを書く。

なお、わが国には、一九三二年の「巴里・東京新興美術展」に数点の油彩作品がきており、そのうちの一点「水底の風景」が残って、大阪の個人コレクションにある。また、一九三七年の「超現実主義作品展」(春島会主催・組織委員は、P・エリュアール、G・ユニエ、R・ペンローズ、滝口修造。山田散生)に横長の小さなガッシュ二点がきている。これらは神奈川の個人

コレクションに入る。戦後では、六二年の「フランス美術展」で油彩の「コンポジション」を見ることができた。ほかには、油絵の小品「四角の星」が長岡現代美術館にある。

*

一般にタンギーが絵を描きはじめたのは、履歴のなかにも書いておいたように、ジョルジョ・デ・キリコの初期の作品にたまたま感動したためであるとされ、それは伝説化さえしているといってよい。だが、注意ぶかく、かれの作品の進展をみようとする者には、その少しまえの体験が同じくらいに重要なものとなるだろう。かれは、除隊されてパリの巷をほつつき歩きながら、きわめて乏しい生活のなかにもプレヴェールなど知友と語らって純粋な青春を謳歌したのだが、そのおり、とある本屋で、イジドール・デュカス（ロートレアモン）の、あの「マルドロールの歌」をみつけたのだった。この六つの歌からなる散文詩篇を一語にしていることはできないけれども、少なくともそれが多くの試練と残ぎやくきわまりない影像のゆく末とを人間に加えながら、たくましい生のありようを瞥見しているものであり、表現の上からいうなら、アルチュール・ランボオとも共通するところの「世界共通語」の実現をめざしているということはできるであろう。このあとタンギーは、モンパルナスのキャップフェで、紙きれやナプキン、テーブルクロスなどに、まったく自発的に、たくさんのスケッチをものしたという。それらのスケッチはファンタジイ